

凱旋祭

泉鏡花

青空文庫

紫の幕、紅の旗、空の色の青く晴れたる、草木の色の緑なる、唯うつくしきものの弥が上に重なり合ひ、打混じて、譬へば大なる幻燈の花輪車の輪を造りて、烈しく舞出で、舞込むが見え候のみ。何をか緒として順序よく申上げ候べき。全市街はその日朝まだきより、七色を以て彩られ候と申すより他はこれなく候。

紀元千八百九十五年一月一日の凱旋祭は、小生が覚えたる観世物の中に最も偉なるものに候ひき。

知事の君をはじめとして、県下に有数なる頭官、文官武官の数を尽し、有志の紳商、在野の紳士など、尽く銀山閣といふ倶楽部組織の館に会して、凡そ半月あまり趣向を凝されたるものに候よし。

先づ巽公園内にござ候記念碑の銅像を以て祭の中心といたし、ここを式場にあて候。この銅像は丈一丈六尺と申すことにて、台石は二間に余り候はむ、兀如として喬木の梢に立ちをり候。右手に提げたる百鍊鉄の劍は霜を浴び、月に映じて、年紀古

れども 錆色 見え、仰ぐに日の光も寒く輝き候。

銅像の頭より八方に綱を曳きて、数千の鬼灯提灯を繋ぎ懸け候が、これをこそ趣向と申せ。一ツ一ツ皆真蒼に彩り候。提灯の表には、眉を描き、鼻を描き、眼を描き、口を描きて、人の顔になぞらへ候。

さて目も、口も、鼻も、眉も、一様普通のものにてはこれなく、いづれも、ゆがみ、ひそみ、まがり、うねりなど仕り、なかには念入にて、酔狂にも、真赤な舌を吐かせたるが見え候。皆切取つたる敵兵の首の形にて候よし。さればその色の蒼きは死相をあらはしたるものに候はむか。下の台は、切口なればとて赤く塗り候。上の台は、尋常に黒くいたし、辮髪とか申すことにて、一々 蕨縄にてぶらぶらと釣りさげ候。一ツは仰向き、一ツは俯向き、横になるもあれば、縦になりたるもありて、風の吹くたびに動き候よ。

二

催のかかることは、ただ九牛の一毛に過ぎず候。凱旋門は申すまでもなく、一い廓数百金を以て建られ候。あたかも記念碑の正面にむかひあひたるが見え候。またその

傍に、これこそ見物に候へ。ここに三抱に余る山桜の遠山桜とて有名なるがごき候。その梢より根に至るまで、枝も、葉も、幹も、すべて青き色の毛布にて蔽ひ包みて、見上ぐるばかり巨大なる象の形に拵へ候。

毛布はすべて旅団の兵員が、遠征の際に用ゐたるをつかひ候よし。その数八千七百枚と承り候。長蛇の如き巨象の鼻は、西の方にさしたる枝なりに一二蜿蜒り蜿蜒りて唧筒を見るやう、空高き梢より樹下を流るる小川に臨みて、いま水を吸ふ処に候。脚は太く、折から一員の騎兵の通り合せ候が、兜形の軍帽の頂より、爪の裏まで、全体唯その前脚の後にかくれて、纔に駒の尾のさきのみ、此方より見え申し候。かばかりなる巨象の横腹をば、真四角に切り開きて、板を渡し、このみ赤き氈を敷詰めて、踊子が舞の舞台にいたし候。葉桜の深翠したたるばかりの頃に候へば、舞台の上下にいや繁りに繁りたる桜の葉の洩れ出で候て、舞台は薄暗く、緋の毛氈の色も黒ずみて、もののしめやかなるなかに、隣国を隔てたる連山の巔遠く二ツばかり眉を描きて見渡され候。遠山桜あるあたりは、公園の中にも、眺望の勝景第一と呼ばれたる処に候へば、式の如き巨大なる怪獣の腹の下、脚の四ツある間を透して、城の櫓見え、森も見え、橋も見え、日傘さして橋の上渡り来るうつくしき女の藤色の衣の色、あたかも藤の花一片、一片の藤の花、

いといと小さく、ちらちら眺められ候ひき。

こは月のはじめより造りかけて、凱旋祭の前一日の昼すぎまでに出来上り候を、一度見たる時のことに有之候。

夜に入ればこの巨象の両個の眼に電燈を灯し候。折から曇天に候ひし。一体に樹立深く、柳松など生茂りて、くらきなかに、その蒼白なる光を洩し、巨象の形は小山の如く、喬木の梢を籠めて、雲低き天に接し、朦朧として、公園の一方にあらはれ候時こそ怪獣は物凄まじきその本色を顯し、雄大なる趣を備へてわれわれの眼には映じたれ。白昼はヤハリ唯毛布を以て包みなしたる山桜の妖精に他ならず候ひし。雲はいよいよ重く、夜はますます闇くなり候まま、炬の如き一双の眼、暗夜に水銀の光を放ちて、この北方三十間、小川の流一たび灌ぎて、池となり候池のなかばに、五条の噴水、青竜の口よりほとぼしり、なかぞらのやみをこぼれて篠つくばかり降りかかる吹上げの水を照し、相對して、またさきに申上候銅像の右手に提げたる百鍊鉄の劍に反映して、次第に黒くなりまさる漆の如き公園の樹立の間に言ふべからざる森嚴の趣を呈し候、いまにも雨降り候やうなれば、人さきに立帰り申候。

あくれば凱旋祭の当日、人々が案じに案じたる天候は意外にもおだやかに、東雲より密雲破れて日光を洩し候が、午前に到りて晴れ、昼少しすぐるより天晴なる快晴となり澄し候。

さればこそ前申上げ候通り、ただうつくしく賑かに候ひし、全市の光景、何より申上げ候はむ。ここに繰返してまた単に一幅わが県全市の図は、七色を以てなどりて彩られ候やうなるおもひの、筆執ればこの紙面にも浮びてありありと見え候。いかに貴下、さやうに候はずや。黄なる、紫なる、紅なる、いろいろの旗天を蔽ひて大鳥の群れたる如き、旗の透間の空青き、樹々の葉の翠なる、路を行く人の髪の毛の黒き、簪の白き、手絡の緋なる、帯の錦、袖の綾、薔薇の香、伽羅の薫の薫するなかに、この身体一ツはさまれて、歩行くにあらず立停るといふにもあらで、押され押され市中をいきつくたびに一歩づつ式場近く進み候。横の町も、縦の町も、角も、辻も、山下も、坂の上も、隣の小路もただ人のけはひの轟々とばかり遠波の寄するかと、ひっそりしたるなかに、あるひは高く、あるひは低く、遠くなり、近くなりて、耳底に響き候のみ。裾の埃、歩の砂に、両側の二階

家の欄干らんかんに、果しなくひろげかけたる紅の毛氈もうせんも白くなりて、仰げば打重うちかさなる見物の男女なんによが顔も臃おぼろげなる、中空にはむらむらと何にか候らむ、陽炎かげろうの如きもの立ち迷ひ候。

万丈の塵ちりの中に人の家の屋根より高き処々、中空に斑々はんはんとして目覚めざましき牡丹ぼたんの花の翻りて見え候。こは大なる母衣ほろの上に書いたるにて、片端には彫刻したる獅子の頭かしらを縫ぬひつけ、片端には糸を束つかねてふつさりと揃へたるを結び着け候。この尾と、その頭と、及び件の牡丹の花描いたる母衣とを以て一頭の獅子にあひなり候。胴中には青竹を破わりて曲げて環にしたるを幾いくところ処いにか入れて、竹の両はしには屈くつきよう竟の壮佼わかもものゐて、支へて、膨ふくかに幌ほろをあげをり候。頭かしらに一人の手して、力逞たくましきが猪首いくびにかかげ持ちて、朱盆の如き口を張り、またふさぎなどして威を示し候都度つど、仕掛を以てカツカツと金色こんじきの牙の鳴るが聞え候。尾のつけもとは、ここにも竹の棹さおつけて支へながら、人の軒より高く突上げ、鷹揚おうように右左に振り動かし申候。何貫目やらむ尾にせる糸をば、真紅の色に染そめたれば、紅の細き滝支ふる雲なき中空より逆さかさにおちて風に揺ゆらる趣見え、要するに空間に描きたる獸王の、花々しき牡丹の花衣はなぎぬ着けながら躍り狂ふにことならず、目覚しき獅子の皮の、かかる牡丹の母衣の中に、三昧さいみ、胡弓こきゆう、笛、太鼓、鼓を備へて、節をかしく、かつ行き、

かつ鳴して一ゆるぎしては式場さして近づき候。母衣の裾よりうつくしき衣の裾、ちひさき女の足などこぼれ出でて見え候は、歌姫の上手をばつどへ入れて、この楽器を司らせたるものに候へばなり。

おなじ仕組の同じ獅子の、唯一つには留まらで、主立つたる町々より一つづつ、すべて十五、六頭り出だし候が、群集のなかを処々横断し、点綴して、白き地に牡丹の花、人を蔽ひて見え候。

四

群集ばらばらと一斉に左右に分れ候。

不意なれば蹠踉めきながら、おされて、人の軒に仰ぎ依りつつ、何事ぞと存じ候に、黒き、長き物ずるずると来て、町の中央を一文字に貫きながら矢の如く駆け抜け候。

これをば心付き候時は、ハヤその物体の頭は二、三十間わが眼の前を走り去り候て、いまはその胸中あたり連りに進行いたしをり候が、あたかも風の糸を繰出す如く、走馬燈籠の間断なきやう俄に果つべくも見え申さず。唯人の頭も、顔も、黒く塗りて、肩よ

り胸、背、下腹のあたりまで、墨もていやが上に濃く塗りこくり、赤禪襠あかふんどし着けたる臀いしき、脛はざ、足、踵かかと、これをば朱を以て真赤に色染めたるおなじ扮装いでたちの壮佼わかもものたち、幾百人か。一人行く前の人の後あとへ後へと繋つなぎあひ候が、繰出す如くずんずんときき候。およそ半時間、は連続いたし候ひしならむ、やがて最後の一人の、身体からだ黒く足赤きが眼前をよぎり候あと、またひらひらと群集左右より寄せ合うて、両側に別れたる路を塞ふさぎ候時、その過行すぎゆきし方を打眺うちながめ候へば、彼の怪物の全体は、遙はるかなる向の坂をいま蜿うねり蜿りのぼり候首尾の全きを、いかにも蜈蚣むかでと見受候。あれはと見る間に百尺波状の黒線こくせんの左右より、二条の砂煙さえんましろ真白にぱつと立つたれば、その尾のあたりは埃ほこりにかくれて、躍然やくぜんとして擡もたげたるその白うすの如き頭ことうべのみ坂の上り尽くる処雲の如き大銀杏おおいちようこすえの梢むかでとならびて、見るがうちに、またただ七色の道路のみ、獅子の背のみ眺ながめられて、蜈蚣は眼界を去り候。疾とく既に式場に着し候ひけむ、風聞うわさによれば、市内各処における労働者、たとへばぼてふり、車夫、日ひよう傭取とりなどいふものの総人数をあげたる、意匠パフナリーの俄に候とよ。

彼の巨象と、幾頭の獅子と、この蜈蚣と、この群集とが遂ついに皆式場に会したることをおん含ふくみの上、静にお考へあひなり候はば、いかなる御感おんかんじか御胸おんむねに浮び候や。

五

別に凱旋門と、生首提灯と小生は申し候。人の目鼻書きて、青く塗りて、血の色染めて、黒き蕨繩着けたる提灯と、竜の口なる五条の噴水と、銅像と、この他に今も眼に染み、脳に印して覚え候は、式場なる公園の片隅に、人を避けて悄然と立ちて、淋しげにあたりを見まはしをられ候、一個年若き佳人にござ候。何といふいはれもあらで、薄紫のかはりたる、藤色の衣着けられ候ひき。

このたび戦死したる少尉B氏の令閨に候。また小生知人にござ候。

あらゆる人の嬉しげに、楽しげに、をかしげに顔色の見え候に、小生はさて置きて夫人のみあはれに悄れて見え候は、人いきりにやのぼせたまひしと案じられ、近う寄り声をかけて、もの問はむと存じ候折から、おツといふ声、人なだれを打つて立騒ぎ、悲鳴をあげて逃げ惑ふ女たちは、水車の齒にかかりて撥ね飛ばされ候やう、倒れては遁げ、転びては遁げ、うづまいて来る大蜈蚣のぐるぐると巻き込む環のなかをこぼれ出で候が、令閨とおよび五三人はその中心になりて、十重二十重に巻きこまれ、遁る隙なく伏まらるひし。警官駈けつけて後、他は皆無事に起上り候に、うつくしき人のみは、そのまま裳を

まげて、起たず横はり候。ちりほこり塵埃ちりほこりのそのつややかなる黒髪を汚けがす間もなく、衣紋えもんの乱るまもなく、かうはなりはてられ候ひき。

むかでは、これがために寸断され、此処ここに六尺、彼処かしこに二尺、三尺、五尺、七尺、一尺、五寸になり、一分になり、寸々ずたずたに切り刻まれ候が、身体からだの黒き、足の赤き、切れめ切れめに酒氣を帯びて、一つづつうごめくを見申し候。

日暮れて式場なるは申すまでもなく、十万の家軒ごとに、おなじ生首提灯の、しかも丈三尺ばかりなるを揃うて一斉いつせいに灯し候へば、市内の隈々くまぐま塵塚ちりづかの片隅までも、真蒼まつさおき昼とあひなり候。白く染め抜いたる、目、口、鼻など、大路小路の地の上に影を宿して、青き灯ひのなかにたとへば蝶の舞ふ如く蠟燭ろうそくのまたたくにつれて、ふはふはその幻まぼろしの浮いてあるき候ひし。ひとり、唯、単に、一字いちじの門のみ、生首ひともに灯きで、淋さびしく暗かりしを、怪しといふ者候ひしが、さる人は皆人の心も、ことのやうをも知らざるにて候。その夜更ふけて後、俄然がぜんとして暴風起り、須臾しゆゆのまに大方の提灯を吹き飛ばし、残らず灯ひきえて真まつく闇やみになり申し候。闇夜やみよのなかに、唯一すさツ凄まじき音聞え候は、大木の吹折られたるに候よし。さることのくはしくは申上げず候。唯今風の音聞え候。何につけてもおおなつかしく候。

月

日
ち
い
様

青空文庫情報

底本：「外科室・海城発電 他五篇」岩波文庫、岩波書店

1991（平成3）年9月17日第1刷発行

2000（平成12）年9月5日第18刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第三卷」岩波書店

1942（昭和17）年12月25日第1刷発行

初出：「新小説」第二年第六卷

1897（明治30）年5月

※「読みにくい語、読み誤りやすい語には現代仮名づかいで振り仮名を付す。」との底本の編集方針にそい、ルビの拗促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：鈴木厚司

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

凱旋祭

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>